

## 感染症予防行動が中学生のコミュニケーションの困難感に与える影響

### ～対人スキルの観点から見たコロナ禍における自他の心と体を守る力の育成～

後藤 美由紀 ・ 中條 和光\* ・ 森田 愛子\*

#### 1. はじめに

広島大学附属東雲中学校（以下、本校と略記）では、2015 年度より『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」を研究テーマに設定し、附属東雲小学校と共同で実践研究を行っている。グローバル時代をきりひらく資質・能力を、「さまざまな文化や価値観を理解し多様性を認め合いながら自分の考えを明確にして問題を解決する力」と定義し、保健教育領域では、授業などの学習場面だけでなく、日常生活の様々な場面で他者とかかわる際に、よりよいコミュニケーション能力を身につけておくことがそれぞれの場面の基盤になるのではないかと考え、日々保健室において児童生徒の心身の健康に対する支援を行っている養護教諭の立場から、様々なアプローチを探ってきた。

しかし、2020 年初めから出来したコロナ禍により、生徒らは今までにない状況の中で様々な不安を抱え、学校生活を送ることとなった。

一過性の流行り病かと思われたが、未曾有の新型感染症であり、予想以上に長期にわたる感染拡大が見られたことにより、全国の学校ではクラスターとよばれる集団発生を防ぐための様々な感染予防対策がとられた。その中には、学習場面における活動やグループ学習、部活動の制限、学校行事の中止など生徒らが仲間関係を深めたり、コミュニケーションスキルを学んだりする場を失うような対策も含まれている。

養護教諭は、けがや体調不良での来室以外にも、朝の健康観察カードを忘れた生徒に接する時、少人数で健康診断を実施する時、各学級を回って感染症予防についてのミニ保健指導を行う時など、様々な場面において児童生徒に接する機会がある。

その際に、生徒の言動と感染予防行動への意識やコミュニケーション傾向との間に関連があるのではないかと考えられる場面が多々見られるようになった。そこで、後藤ら(2021)では、新型コロナウイルスの感染予防行動が中学生のコミュニケーションに与える影響を探る調査研究を行った。その調査の中で、生徒はコロナ禍前と比較し他者の非言語的な（ノンバーバル）行動を気にするようになったことが見いだされた。その背景に、思いを伝え理解するコミュニケーションスキルの低さから他者理解の困難さが増している可能性などが示唆された。

生徒らは黙食や部活動の中止などで授業外の自由時間に話をする、声をかけ合うなどの言語的（バーバル）なコミュニケーションが制限され、さらにマスクで顔が隠れることにより表情を読むなどノンバーバルなコミュニケーションも困難になっている。加えて、対人感の物理的距離を保つことを求められるソーシャルディスタンスによってバーバル、ノンバーバルの両方でのコミュニケーションが難しくなり、友達との関わりから得られるであろう自身の言動への気づきやその気づきによるコミュニケーションスキルの獲得や成長の機会が制限されているのではないかと考えられる。

このような状況下における中学生にどのように寄り添い支援していけばよいのであろうか。『改訂「生きる力」を育む中学校保健教育の手引き』（文部科学省、2020）は、「個々の生徒が抱える課題を受け止めながら、その解決に向けて、主に個別の会話・面談や言葉がけを通して指導や援助を行うカウンセリングといった個別指導を関連させて、生徒の発達を支援することも重要である」と述べている。そこで、本研究では、後藤ら（2021）の調査研究を継続し、学校生活において感染症予防行動が求められる状況が継続する中で生徒らの縦断的な変化を追うことを通して、自分や仲間の体と心を守る力を育成すると

---

\* 広島大学大学院人間社会科学研究科

Miyuki GOTOU, Kazumitsu CHUJO, Aiko MORITA

A longitudinal study on the influence of preventive behavior on communication difficulties among junior high school students during infectious disease epidemic

いう保健教育の視点からの支援方法を検討する。

## 2. 研究について

### (1) 研究の目的

本研究では、感染症予防のための行動によりコミュニケーションの制限がかかる状況の中での不安や困難感と、個々のコミュニケーションスキルの高低との関連を調べることで、保健室を中心とした個別の心のケアや支援、また学級担任等との連携、コミュニケーションスキル向上のための集団指導の内容検討に生かすことを目的とした。

2020 年度の調査(後藤ら, 2021)において、中学生コロナ禍における不安感や困難感についての様々な記述から、「相手の気持ちがよくわからない」という他者理解の苦手さや「自分の気持ちがうまく伝わらない」という意思伝達の困難さがその背景にある可能性が見えてきた。そこで 2021 年度も引き続き、アンケート調査で、個々の生徒の感染症予防のための行動、他者理解・意思伝達のスキル、不安や困難感を測定し、それらの関連を調べることにした。

### (2) 研究の方法

2020 年度とほぼ同様の調査を実施し、現在の自己の感染症予防行動に対する意識、学校における友達の感染症予防行動に対する感じ方、コミュニケーションスキル、1 年前と比較したバーバル・ノンバーバルコミュニケーションの変化を尋ね、2020 年度と 2021 年度の比較を行った。併せて、現在の学年における対人場面での不安や困難感についての自由記述を求めた。その自由記述から不安や困難感を抱えている生徒を抽出し、前述の量的データ測定との関連を調べた。

#### ①調査の実施について

2021 年 6 月下旬～7 月初旬に質問紙調査を実施した。調査対象者は、中学校 1～3 年生(各学年 2 クラス)230 名であった。内訳は 1 年生 78 名、2 年生 75 名、3 年生 77 名(2020 年度は 1 年生 79 名、2 年生 78 名、3 年生 77 名)で、このうち 2 年生と 3 年生は 2020 年度と共通であった。本校の生徒の構成の特徴として、隣接する附属東雲小学校からの入学者と県内の公立小学校からの入学者がおり、各学年によって差はあるが隣接小学校からの入学者が 2～3 割を占める。質問紙は記名式であった(資料)。養護教諭である第一著者が各学級で調査を実施し、今後の感染症予防の意識についての講話を行った。所要時間は 10～15 分であった。

#### ②調査項目について

まず、本研究の目的は、感染症予防によってコミュニケーションに制限がかかっているという状況下での生徒の不安や困難を明らかにし、それらへの支援を検討することであるため、現在の自己の感染症予防行動に対する意識、友達の感染症予防行動についての感じ方を調べた。項目は、2020 年度調査と同一であった。

それらの意識・感じ方が、個のコミュニケーションスキルによって異なると考えられたため、コミュニケーションスキルを測定した。2020 年度と同様に、東海林ら(2012)の作成した「中学生用コミュニケーション基礎スキル尺度」の中から、意思伝達スキル 8 項目及び他者理解スキル 4 項目を用いた。本尺度は、「特定の場面や状況」にとどまらず、行動・認知・感情の要素を網羅していることが特徴である。

1 年前に比べたコミュニケーションの困難感の変化については、言語情報である「言葉」、非言語情報である「表情・視線・声・しぐさ・姿勢・距離」といったコミュニケーションの要素について尋ねた。その際、「気持ちを伝える」「気持ちがわかる」といった意思伝達・他者理解の評価の変化も同時に測定した。

以上のような実態調査・尺度測定に加え、2021 年 4 月以降に時期を限定し、友人との対人場面における不安や困難感等を記入する自由記述欄を設けた。

アンケートの各質問内容・回答方法については以下の通りである。

#### 1-①. 現在の自己の感染症予防行動について

学校で指導している感染症を予防するための行動 7 項目を設定し、自身が気を付けているかを

「気をつけていない(1点)」「あまり気をつけていない(2点)」「少し気をつけている(3点)」「気をつけている(4点)」の4件法で回答させた。

**1-②. 学校における友達の感染症予防行動に対する感じ方について**

自己の感染症予防行動と同じ7項目について、友達の行動に対してどう感じるかを「不安に感じる(3点)」「少し不安に感じる(2点)」「気にならない(1点)」の3件法で回答させた。

**1-③. コミュニケーションスキル尺度(意思伝達・他者理解)**

意思伝達スキル8項目及び他者理解スキル4項目計12項目について東海林ら(2012)にしたがい「はい(3点)」「どちらでもない(2点)」「いいえ(1点)」の3件法で回答させた。ただし、「どちらでもない」への回答の集中を避けるため、回答に際しては「なるべく『はい』『いいえ』で答えてください」と教示した。

**2. 友人との対人場面における自他のバーバル・ノンバーバルコミュニケーションの変化**

コミュニケーションにおける言語・非言語情報、意思伝達・他者理解の要素を含めた13項目について、コロナ禍の初期にあたる1年前と比べて感じ方が変化したかを「気にならなくなった(1点)」「変わらない(2点)」「気にするようになった(3点)」の3件法で回答させた。

**3. 現在の学年における友人との対人場面での不安や困難感についての自由記述**

「今年の4月から今までの間で」「友達と関わる時に感じる、困ったことや気になること」について、現在の学年及び対人場面に限定して記述を求めた。

**3. 調査結果と考察**

各質問項目について、2021年度の結果及び2020年度の結果との経年比較について考察する。

**(1) 自己・友人の感染予防行動について【設問1-①, 1-②】**

まず、調査の時期に自分がどの程度、感染予防行動に対して気をつけているかという問いに対する回答を学年別に集計・分析した(表1)。

**表1 自己の感染予防行動に対する意識(学年別平均・経年比較)**

2020年度	1年 ( n=79 )		2年 ( n=78 )		3年 ( n=77 )	
	M	SD	M	SD	M	SD
マスクを正しくつける	3.82	( 0.55 )	3.87	( 0.44 )	3.82	( 0.51 )
こまめに手を洗う	3.38	( 0.77 )	3.58	( 0.63 )	3.40	( 0.65 )
アルコールで手指を消毒する	3.48	( 0.75 )	3.59	( 0.65 )	3.43	( 0.75 )
友達と距離をとる	2.54	( 0.73 )	2.51	( 0.68 )	2.38	( 0.84 )
友達と大声で笑い合わない	2.63	( 0.86 )	2.59	( 0.86 )	2.55	( 0.80 )
友達としゃべらずにお弁当を食べる	3.89	( 0.51 )	3.87	( 0.44 )	3.71	( 0.56 )
声の大きさに気をつける	3.10	( 0.74 )	3.12	( 0.84 )	2.91	( 0.75 )
7項目の平均値	3.26	( 0.47 )	3.30	( 0.43 )	3.17	( 0.49 )
2021年度	1年 ( n=78 )		2年 ( n=75 )		3年 ( n=77 )	
	M	SD	M	SD	M	SD
マスクを正しくつける	3.88	( 0.46 )	3.91	( 0.34 )	3.94	( 0.34 )
こまめに手を洗う	3.46	( 0.72 )	3.37	( 0.65 )	3.66	( 0.60 )
アルコールで手指を消毒する	3.79	( 0.54 )	3.67	( 0.58 )	3.82	( 0.51 )
友達と距離をとる	2.60	( 0.59 )	2.61	( 0.73 )	2.66	( 0.68 )
友達と大声で笑い合わない	2.67	( 0.77 )	2.65	( 0.88 )	2.66	( 0.87 )
友達としゃべらずにお弁当を食べる	3.90	( 0.44 )	3.95	( 0.32 )	3.96	( 0.19 )
声の大きさに気をつける	3.08	( 0.79 )	2.96	( 0.74 )	3.04	( 0.79 )
7項目の平均値	3.34	( 0.44 )	3.30	( 0.40 )	3.39	( 0.37 )

7 項目の平均値について, 2 (年度: 2020, 2021) × 3 (学年: 1, 2, 3) の 2 要因分散分析を行った。その結果, 年度の主効果が有意であり ( $F(1, 458) = 5.946, p = .015, \eta^2 = .013$ ), 2020 年度より 2021 年度の方が予防行動への意識が高かった。学年の主効果は有意ではなかった ( $F(2, 458) = 0.129, p = .879, \eta^2 = .001$ ), 交互作用が有意傾向であったため ( $F(2, 458) = 2.561, p = .078, \eta^2 = .011$ ), 下位検定を行ったところ, 3 年生のみ, 2021 年度の方が予防行動への意識が高かった。

3 年生で変化があったことから, 補足的に, 縦断比較も実施した。すなわち, 2020 年度の 1 年生 2 年生が, 2021 年度に 2 年生 3 年生になってどのように変化したかという比較である。2 (年度: 2020, 2021) × 2 (2021 年度の学年: 2, 3) の 2 要因分散分析を行った結果, 有意な効果はみられなかった。ただし, 平均値をみると, 2021 年度の 3 年生は 2 年時からの高まりがやや大きい。上記の横断比較の結果もあわせて考えると, 2021 年 5 月に実施予定だった体育祭の係活動で中心となった 3 年生が, 準備や練習などの活動において感染予防対策への意識を高めたことが背景にあるのではないかと考えられる。

表 2 友人の感染予防行動に対する意識(学年別平均・経年比較)

2020 年度	1 年 ( n=79 )		2 年 ( n=78 )		3 年 ( n=77 )	
	M	SD	M	SD	M	SD
マスクをつける	2.62	( 0.65 )	2.58	( 0.66 )	2.57	( 0.66 )
こまめに手を洗う	2.59	( 0.65 )	2.54	( 0.70 )	2.43	( 0.66 )
アルコールで手指を消毒する	2.63	( 0.60 )	2.53	( 0.62 )	2.48	( 0.60 )
自分と距離をとる	2.13	( 0.72 )	2.08	( 0.53 )	2.12	( 0.61 )
自分と大声で笑い合う	2.09	( 0.72 )	1.97	( 0.62 )	1.92	( 0.53 )
自分としゃべらずにお弁当を食べる	2.78	( 0.52 )	2.56	( 0.66 )	2.48	( 0.62 )
声の大きさに気をつけている	2.28	( 0.68 )	2.24	( 0.63 )	2.17	( 0.57 )
7項目の平均値	2.45	( 0.42 )	2.36	( 0.43 )	2.31	( 0.45 )
2021 年度	1 年 ( n=78 )		2 年 ( n=75 )		3 年 ( n=77 )	
	M	SD	M	SD	M	SD
マスクをつける	1.28	( 0.56 )	1.39	( 0.59 )	1.29	( 0.53 )
こまめに手を洗う	1.27	( 0.50 )	1.33	( 0.55 )	1.26	( 0.52 )
アルコールで手指を消毒する	1.15	( 0.43 )	1.28	( 0.51 )	1.32	( 0.55 )
自分と距離をとる	1.71	( 0.70 )	1.69	( 0.66 )	1.57	( 0.66 )
自分と大声で笑い合う	1.55	( 0.64 )	1.83	( 0.64 )	1.61	( 0.67 )
自分としゃべらずにお弁当を食べる	1.15	( 0.43 )	1.19	( 0.48 )	1.29	( 0.58 )
声の大きさに気をつけている	1.56	( 0.64 )	1.65	( 0.60 )	1.58	( 0.68 )
7項目の平均値	1.38	( 0.37 )	1.48	( 0.35 )	1.41	( 0.41 )

次に, 友人の感染予防行動に対する意識を同様に集計した(表 2)。上と同様の 2 要因分散分析を行った結果, 年度の主効果が有意であった ( $F(1, 458) = 626.107, p < .001, \eta^2 = .578$ )。前述の自己の感染予防行動に対するものとは逆に, 2020 年度より 2021 年度の方が, 友達の予防行動への不安は低かった。学年の主効果は有意ではなかった ( $F(2, 458) = 0.897, p = .408, \eta^2 = .004$ )。交互作用は有意傾向であったが ( $F(2, 458) = 2.516, p = .082, \eta^2 = .011$ ), 下位検定の結果, 有意な単純主効果は得られなかった。平均値でいえば, 2020 年度において, 1 年生が 3 年生より不安が高いという結果ではある。

これらのことから, 予防行動に慣れてきて「みんなが実践している」と意識できる実態があると推測される。自分は気をつけるようになっており, 友達の行動にも安心できている状況がうかがえる。ただし, 慣れたことによって, 2020 年度ほど, 他者の予防行動に敏感にならなくなったために「気にならなくなった」という可能性も残される。

## (2) コミュニケーションスキル尺度について【設問 1-③】

各項目の平均値を学年別・年度別に表 3 に示す。

12 項目のうち、①～⑧は意思伝達スキル、⑨～⑫は他者理解スキルに関するものである。なお、各スキルの中でさらに意思伝達スキルは「適切さ」「他者に伝わる」ことに関するものに分かれている。意思伝達スキルと他者理解スキルのいずれについても、2（年度）×3（学年）の2要因分散分析の結果、年度や学年による違いは見られなかった。

そこで、個々の項目に着目して述べたい。

2020 年度の1年生で最も低かったのは④「私は、気持ちをことばで表現するのが得意です」という質問で、2・3年生については⑩「私は、表情から相手の気持ちを想像するのが得意です」という質問だった。これは、マスクにより相手の表情を読みとることが阻害されることによる不安と考えられる。

2021 年度も同様に④の数値が低くなっていることから、年度にかかわらず気持ちを言語表出することが苦手な生徒が多いことが読み取れる。さらに、2021 年度の1年生においては⑫「私は、ことばがなくても相手の伝えたいことがわかります」（非言語による他者理解）も同点で低く、⑩「私は、相手が何を考えているか、わかります」（推測による他者理解）が最も低くなっていることから、マスクの着用にかかわらずノンバーバルなコミュニケーションが苦手な生徒が多いと考えられる。

また、他者理解スキルでは⑩「表情から相手の気持ちを想像するのが得意」について見てみると、昨年は学年が上がるにつれ低くなっていたが、今年は逆に学年が上がるほど高くなっていた。これは、コロナ禍が長引く中でコミュニケーションの制限に慣れ、コロナ禍以前から一緒にいる時間の長い上学年ほど不安が少なくなっていたのではないかと考えられる。

表 3 質問別の学年平均

2020	意思伝達（適切さ）				意思伝達（他者に伝わる）				他者理解（非言語）			他者理解（推測）
	②	④	⑥	⑧	①	③	⑤	⑦	⑨	⑪	⑫	⑩
1年	2.38	<b>1.95</b>	2.24	2.19	2.20	2.11	2.47	2.48	2.39	2.03	2.10	<b>1.97</b>
2年	2.37	2.09	2.36	2.37	2.21	2.38	2.54	2.49	2.44	<b>1.90</b>	2.12	2.12
3年	2.43	<b>1.96</b>	2.47	2.34	2.31	2.31	2.60	2.64	2.44	<b>1.84</b>	2.16	2.14

  

2021	意思伝達（適切さ）				意思伝達（他者に伝わる）				他者理解（非言語）			他者理解（推測）
	②	④	⑥	⑧	①	③	⑤	⑦	⑨	⑪	⑫	⑩
1年	2.36	<b>1.94</b>	2.29	2.32	2.35	2.33	2.55	2.55	2.26	2.37	<b>1.94</b>	<b>1.91</b>
2年	2.29	<b>1.99</b>	2.32	2.25	2.11	2.09	2.57	2.55	2.47	2.43	2.13	2.05
3年	2.26	<b>2.00</b>	2.23	2.39	2.18	2.38	2.79	2.66	2.51	2.52	2.21	2.17

### (3) 自他のバーバル・ノンバーバル行動の変化について【設問2】

続いて自他のバーバル・ノンバーバル行動（言語・非言語コミュニケーション）に関する意識の1年前からの変化について表4に示す。

自分のノンバーバル行動（表情・視線・声・しぐさ）4項目について平均値を算出し、2（年度）×3（学年）の2要因分散分析を実施した。その結果、年度と学年の主効果がいずれも有意傾向であった（順に、 $F(1, 456) = 3.005, p = .084, \eta^2 = .007$ ;  $F(2, 456) = 2.801, p = .062, \eta^2 = .012$ ）。2020 年度より 2021 年度のほうが、「1 年前からの変化」が小さい傾向があった。コロナ禍開始時の方が自己の行動についての認識の変化が大きいということであり、当然の違いとも思われるが、それほど大きな変化ではなかった。学年については、多重比較の結果、いずれの学年間にも有意差はみられなかったが、平均値を見ると、1 年生の方が 3 年生より変化の程度がやや大きい。交互作用は有意ではなかった ( $F(2, 456) = 0.117, p = .889, \eta^2 = .001$ )。

友達のノンバーバル行動についても同様の分析を行った。年度の主効果は有意ではなかった ( $F(1, 456) = 0.021, p = .884, \eta^2 = .000$ )。学年の主効果が有意であり ( $F(2, 456) = 5.265, p = .005,$

$\eta^2=.023$ ), 1 年生は 3 年生より気にするようになる変化が大きかった。交互作用は有意ではなかった ( $F(2, 456) = 0.526, p = .592, \eta^2=.002$ )。年生は, 新入生という新たな集団形成が行われる緊張の高い環境でもあり, 流行初期においても中期においても, 友達の行動を気にするように変化しやすいと考えられる。

表 4 対人場面での自他のバーバル・ノンバーバルコミュニケーションに関する意識変化

2020 年度	1 年 ( n=78 )		2 年 ( n=75 )		3 年 ( n=77 )	
	M	SD	M	SD	M	SD
自分の表情	2.18	( 0.59 )	2.16	( 0.54 )	2.08	( 0.58 )
自分の視線	2.29	( 0.53 )	2.11	( 0.48 )	2.12	( 0.46 )
自分の言葉	2.32	( 0.59 )	2.26	( 0.53 )	2.16	( 0.54 )
自分の声	2.20	( 0.52 )	2.29	( 0.48 )	2.18	( 0.48 )
自分のしぐさ	2.29	( 0.46 )	2.26	( 0.53 )	2.09	( 0.52 )
相手に気持ちを伝えられているか	2.42	( 0.57 )	2.34	( 0.53 )	2.29	( 0.56 )
相手の気持ちに気づくことができるか	2.53	( 0.57 )	2.39	( 0.57 )	2.27	( 0.53 )
自分が言葉を選んで話しているか	2.53	( 0.60 )	2.37	( 0.56 )	2.32	( 0.52 )
友達の表情	2.57	( 0.52 )	2.32	( 0.52 )	2.29	( 0.51 )
友達の視線	2.52	( 0.53 )	2.30	( 0.52 )	2.23	( 0.54 )
友達の声	2.27	( 0.52 )	2.34	( 0.56 )	2.16	( 0.51 )
友達のしぐさ	2.33	( 0.57 )	2.29	( 0.54 )	2.17	( 0.52 )
自分と友達との距離	2.42	( 0.52 )	2.46	( 0.55 )	2.32	( 0.52 )

  

2021 年度	1 年 ( n=79 )		2 年 ( n=78 )		3 年 ( n=77 )	
	M	SD	M	SD	M	SD
自分の表情	2.09	( 0.51 )	2.13	( 0.60 )	1.94	( 0.57 )
自分の視線	2.08	( 0.45 )	2.12	( 0.61 )	1.97	( 0.51 )
自分の言葉	2.32	( 0.57 )	2.35	( 0.63 )	2.14	( 0.48 )
自分の声	2.29	( 0.58 )	2.15	( 0.54 )	2.27	( 0.55 )
自分のしぐさ	2.18	( 0.53 )	2.13	( 0.58 )	2.13	( 0.50 )
相手に気持ちを伝えられているか	2.31	( 0.57 )	2.29	( 0.56 )	2.32	( 0.55 )
相手の気持ちに気づくことができるか	2.46	( 0.57 )	2.40	( 0.62 )	2.35	( 0.58 )
自分が言葉を選んで話しているか	2.40	( 0.57 )	2.47	( 0.64 )	2.31	( 0.57 )
友達の表情	2.50	( 0.55 )	2.36	( 0.61 )	2.27	( 0.58 )
友達の視線	2.40	( 0.57 )	2.29	( 0.65 )	2.23	( 0.60 )
友達の声	2.38	( 0.54 )	2.21	( 0.55 )	2.32	( 0.57 )
友達のしぐさ	2.32	( 0.59 )	2.27	( 0.55 )	2.29	( 0.56 )
自分と友達との距離	2.43	( 0.59 )	2.32	( 0.62 )	2.34	( 0.60 )

#### (4) 対人場面での不安・困難感について【設問3】

2021 年度に友人との対人場面での不安や困難感について記入があったのは 1 年生が 41 名(前年度 56 名), 2 年生が 31 名(前年度 32 名), 3 年生が 22 名(前年度 22 名)で 1 年生が最も多く, 2・3 年生については前年とほぼ同じとなった。

1 年生のみ人数が減少している背景としては, コミュニケーションが制限される生活の長さが影響していると考えられる。

さらに, 記述内容を自己に関する記述, 他者に関する記述, 言語・非言語コミュニケーションにふれているか, に大きく分類したものを表 5 に示す。

自己についての記述では, 他者理解の困難さについて減少した反面, 意思伝達の困難さについては増加している。併せて, 自己の対人行動についても 10 人から 28 人に, 他者の対人行動についても 9 人から 20 人に増加している。

この点については, コロナ禍で不安を感じる対人場面が増えたのか, 対人場面における意識が高まったのか今後も引き続き検証していく必要がある。

表 5 自由記述の各項目における記述ありの人数の経年比較

		2020	2021
自己について	他者理解の困難さ	25	20
	意思伝達の困難さ	14	17
	拒否不安	15	9
	孤立感	10	3
	予防行動・意識の低さ	6	9
	対人行動	10	28
コミュニケーション	言語(バーバル)	17	30
	非言語(ノンバーバル)	16	24
他者について	予防行動・意識の低さ	30	30
	対人行動	9	20
	その他	9	10

表 6 では全校の回答人数に加えて、特に不安が高いと見られる記述の多かった 1 年生の回答人数を示した。

経年比較での変化は「意思伝達の困難さ」「他者の対人行動への不安」に関する記述が全校及び 1 年生ともに増加、「孤立感・他者との距離」に関する記述が 2・3 年生で 6 名から 0 名となったこと、「自己の対人行動の不安・認識」に関する記述が 1 年生では減少している反面 2・3 年生で増加している、などである。

「自己の対人行動の不安・認識」が 1 年生のみ減少していること背景には、入学と同時に休校となった 2020 年度 1 年生よりも、コロナ禍を経験してから中学に入学した 2021 年度 1 年生のほうが不安を感じにくかったことが考えられる。

表 6 自由記述の分類とそれぞれの項目について記述した人数(全校・1 年生)

※ ( ) 内は 2020 年度

	自己に関する記述			他者に関する記述		
	他者理解の困難さ	意思伝達の困難さ	自己の対人行動の不安・認識	孤立感・他者との距離	他者の対人行動への不安	他者の予防行動への不安
全校	20 (25)	17 (14)	28 (10)	3 (10)	20 (9)	30 (30)
1 年	12 (12)	5 (0)	7 (17)	3 (4)	10 (4)	12 (14)

各項目の具体的な記述内容を以下に挙げる。

○他者理解の困難さ

- ・マスクをつけているので、相手の表情がわかりづらくて話しかけていいか迷う時がある
- ・友達同士で遊ぶことがなかなかできないため、みんなが得意としているものがわからない

○意思伝達の困難さ

- ・何を言えば相手を不快にさせるのか考えすぎて自分の言いたいことが言いづらい
- ・自分の言いたいことがうまく相手に伝わっているのか気になる
- ・自分が相手とくっつきすぎてしまった時、離れたいと思ってもなかなか言い出せない時がある

○自己の対人行動の不安・認識

- ・本当にそう思っているのかわからなくて勝手に不安になってしまう
- ・自分と一緒にいてよいかかわからない
- ・あの時私は言葉足らずだったな、とか逆に言いすぎたな、とか自分の発言に関して後悔することがある

○孤立感・他者との距離

- ・嫌われることが怖くて自分の意見や自分に関することが言えず,嫌われていないか不安で友達の目,声,視線が気になり相手の表情をうかがって自分を隠すようになった

○予防行動への不満

- ・友達と弁当中に話せなかったり,距離があるとさみしいなと思う
- ・マスクの素材によっては声が聞こえづらくなる
- ・自分から手を繋ぐことはなくなったし相手からのボディタッチを避けてしまっているので,悪い印象を持たれていないか心配

○他者の対人行動への不安

- ・相手が自分の気持ちを隠したまま伝えてくれない
- ・「言葉で言わないなら LINE で」悪口を言われること

○他者の予防行動への不安

- ・〇〇くんが授業中にマスクを取ったり鼻までマスクをしなない時がある
- ・ウィルスが蔓延する前と変わらず抱きついていたり人々や接触してくる人と関わる時に気になる
- ・部活の時間や更衣中に大声で話したり笑ったりしている人がいて少し気になる

(5) 各データの関連について

○対人場面での不安・困難感とコミュニケーションスキル

対人場面での不安・困難感についての記述とコミュニケーションスキルとの関係を見てみたい。他者理解の困難感について記述している生徒 17 名とその他の生徒についてそれぞれ, コミュニケーションスキルの平均値を比較した(表 7)。他者理解の困難感を記述している生徒は, それ以外の生徒と比べて意思伝達スキルのポイントが 8 項目中 7 項目について低く, ⑧「思っていることを表情で表現するのが得意」について 0.3 ポイント高いだけにとどまった。また, 他者理解スキルのポイントは 4 項目中 3 項目についてそれ以外の生徒より高くなっており, ⑫「ことばがなくても相手の伝えたいことがわかります」についてのみ低かった。

このことから, 言葉による意思伝達が苦手だと感じているとともに他者理解の際には言葉に依存しているために, コミュニケーションにおけるパーバル・ノンパーバル両面で不安・困難感を感じている可能性が記述に現れていると考えられる。

表 7 他者理解の困難感についての記述とコミュニケーションスキル尺度平均の経年比較

記述		意思伝達スキル								他者理解スキル			
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
あり	2020	1.95	2.23	2.05	1.82	2.32	2.14	2.41	2.00	2.73	2.32	2.45	2.18
	2021	2.00	1.94	2.06	1.88	2.59	1.94	2.35	2.35	2.53	2.06	2.65	2.18
なし	2020	2.27	2.41	2.29	2.02	2.55	2.37	2.55	2.32	2.39	2.05	2.44	2.12
	2021	2.23	2.33	2.29	1.98	2.64	2.31	2.61	2.32	2.40	2.04	2.19	2.26

本調査に用いたコミュニケーションスキル尺度の「表情」「言葉」という 2 つのキーワードが含まれる質問は, 「非言語コミュニケーション」と「言語コミュニケーション」と関連する質問であり, 生徒の意思伝達・他者理解の困難さと大きく関連するのではないかと考えられた。

まず「表情」というキーワードが含まれる⑧「思っていることを表情で表現するのが得意」⑩「表情から相手の気持ちを想像することが得意」の 2 つのスキルについて「どちらでもない(2)」「いいえ(1)」と回答した自己評価が低い(評価が⑧-⑩で「1-1」「1-2」「2-1)」と考えられる生徒を抽出し, 学年ごとの人数を集計し経年比較したものを表 8 にまとめた。

2021 年においては, いずれのスキルについても自己評価が低い人数は 2 年生が最も多く 10 名だった。これは, 2020 年の入学当初からコミュニケーション情報の制限があり 1 年時に 11 名と最も多かった状態が持続していることから, 元来のスキルの低さもしくはスキルの獲得ができていない可能性が考えられる。

表 8 「表情」に関する意思伝達・他者理解スキルの低い生徒の学年別人数

※ ( ) 内は 2020 年度

	⑧ ⑪ 1-1	⑧ ⑪ 1-2	⑧ ⑪ 2-1	合計
1年	7 (11)	3 (2)	4 (3)	14 (16)
2年	10 (5)	0 (5)	2 (2)	12 (12)
3年	2 (3)	4 (1)	3 (1)	9 (4)

○予防行動, コミュニケーションスキル, ノンバーバルコミュニケーションの相関について

次に, 予防行動とコミュニケーションスキル及び自他のノンバーバルコミュニケーションへの意識の相関について表 9 にまとめた。

2020 年度は自己の感染予防行動とコミュニケーションスキルとの関連が見られたが, 2021 年は関連が見られなかった。これは, 感染症予防行動が定着したことによると考えられる。

また, 2020 年度はノンバーバル行動を「気にするようになった程度」とコミュニケーションスキルの間に関連はなかったが, 2021 年度は, 非常に弱い関連ではあるものの, コミュニケーションスキルが高い生徒の方が「自分のノンバーバル行動を気にするようになった」という関連が見て取れる。コミュニケーションスキルの高さからノンバーバル行動のコミュニケーションにおける大切さに気づき実践への意識も高まっている可能性がある。

表 9 感染症予防行動, コミュニケーションスキル, 自他のノンバーバルコミュニケーションの相関

2020 年度						
	予防_自分	予防_友達	意思伝達	他者理解	NonV_ 自分	NonV_ 友達
予防行動_自分が気をつけている	1.000					
予防行動_友達が気になる	<b>.248</b> **	1.000				
スキル_意思伝達	<b>.226</b> **	<b>.173</b> **	1.000			
スキル_他者理解	<b>.144</b> *	.095	<b>.258</b> **	1.000		
1年前より気になる_自分ノンバーバル	.031	-.001	-.016	.037	1.000	
1年前より気になる_友達ノンバーバル	.033	<b>.128</b> +	.044	.045	<b>.539</b> **	1.000
2021 年度						
	予防_自分	予防_友達	意思伝達	他者理解	NonV_ 自分	NonV_ 友達
予防行動_自分が気をつけている	1.000					
予防行動_友達が気になる	<i>.050</i>	1.000				
スキル_意思伝達	<i>.050</i>	<b>-.117</b> *	1.000			
スキル_他者理解	<i>.017</i>	.045	<b>.237</b> **	1.000		
1年前より気になる_自分ノンバーバル	<b>-.123</b> +	.050	<b>.115</b> *	<b>.183</b> **	1.000	
1年前より気になる_友達ノンバーバル	-.049	<b>.150</b> *	.046	.085	<b>.403</b> **	1.000

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$  **ゴシック**は有意, **太字**は有意傾向, 斜体は 2020/2021 で異なる

○連続同一回答について

ここで, コミュニケーション尺度で「全て 1」や「全て 3」のような回答、連続同一回答を行った生徒の尺度変化や記述変化について紹介したい。

2021 年度 2 年生は, 1 年時 6 人が他者理解スキルについて全ての質問項目で「1」と回答した。そのうち 4 人が 2021 年度「2」または「3」に変わり, 新たに 6 人が全て「1」と回答した。学校生活で

の様子と関連付けてみると、尺度が高くなった生徒は部活動や委員会活動で積極的に取り組む様子が見られたが、低くなった生徒は他者とのトラブルや自分の課題に気づく場面を経験していた。具体的な尺度及び記述の変化を数例挙げる。

例① (他者理解スキルが上がった生徒の記述の変化)

- 1 年時・『友達が自分のことをどう思っているのか』(他者理解の困難さ)
- 2 年時・『自分の気持ちが伝えられない』(意思伝達の困難さ)

例② (他者理解スキルが下がった生徒の記述の変化)

- 1 年時・『嬉しく、少し貴重に感じるが増えました』(ポジティブ)
- 2 年時・『話す時間とコロナに関係はあるのか、部活での水分補給』(批判的)

例①の他者理解スキル尺度が上がった生徒の記述を見ると、1 年時は他者理解の困難さを訴えていたが、2 年時は意思伝達の困難さの訴えに変わっていた。これは本生徒がより深く他者と関わろうとする中での葛藤ではないかと読みとった。

例②の他者理解スキル尺度が下がった生徒の記述では、1 年時には休校後で単純に他者と関わることができる喜びを感じていたが、学級や部活動において人と関わる中で 2021 年度は部活動での他者の予防行動に関心・不満を持つなど他者理解の部分でストレスを感じているとみられる記述があった。

例③ (他者理解スキルが上がった生徒の記述)

- 2 年時・『休校中は顔を見ず、ほぼ電話とメール、LINE だけだったし、今もマスクを外すのはお弁当の時くらいしかないので、表情が分からず何を考えているか分からない』(他者理解への不安)
- 3 年時・無記入

例④ (他者理解スキルが上がったが意思伝達スキルは下がった生徒の記述の変化)

- 2 年時・『コロナに関係なく「うるさい」「不潔」などが気になる』(言葉に反応)
- 3 年時・『大きい声を控えてほしい、コロナも心配だが耳が痛い』(批判的)

次に 2021 年度 3 年生については、2 年時 6 人が他者理解スキルについて全ての質問で「1」と回答し、うち 5 人が 2021 年度「2」または「3」に変わり、新たに 2 人が全て「1」と回答している。

尺度が高くなった生徒は、友達との関わりや教師からの支援により自分の課題を克服したり、異学年グループでのリーダーとして多くの人と関わりながら活動したりする様子が見られた。低くなった生徒は、自己中心的な言動が減ることで周囲との距離が縮まり、友達と積極的に関わる場面が増えたことにより根拠ある自己評価ができた結果、2 年時より下がったのではないかと考えられる。

例③の生徒は、2 年時は 1 年生の間に形成された対人関係が制限される不安に加え、休校とクラス替えによる変化もあり他者理解の不安を記述していたが、2021 年度は無記入だった。

例④の生徒は意思伝達スキルの尺度変化と記述を併せて見た時に、言葉や声という部分は共通して不快感を示しているが、日頃の言動を観察していると、一方的な意思伝達から関わりの中で他者を意識しながらの意思伝達に変化している様子が見られることから、このようなスキル尺度変化になったのではないかと考えられる。

#### 4. 実施後の気づき

感染予防行動に関する意識を経年比較した際に、同じコロナ禍での学校生活を経験したにもかかわらず現 2 年生に比べ現 3 年生の方が意識の変化が大きかったのは、5 月の体育祭(実際は延期となり 10 月に実施)の準備を 3 年生が中心となり行う中で自分達の思い出が数少ない中で実施できるという喜びと、その実施のために感染対策を徹底しなければならないという気持ちが背景にあったのではないかと考えられる。

後藤 美由紀・中條 和光・森田 愛子(2022),「感染症予防行動が中学生のコミュニケーションの困難感に与える影響～対人スキルの観点から見たコロナ禍における自他の心と体を守る力の育成～」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第 51 集」, 68-81.

## 5. おわりに

コロナ禍の学校現場では、教員らが児童生徒の不安に寄り添い支援するための手立てを常に考え続けている。我々養護教諭も今まで以上に児童生徒の不安に接しており、様々な支援の方法を探っているところである。

コロナ禍が続いている中、生徒の意思伝達や他者理解に対する不安、困難感は依然として続いている。ただ、その不安や困難感を引き起こす要因の 1 つであると考えられるコミュニケーションスキルにおける課題は、前述の体育祭等の学校における様々な行事や活動、友達など周囲との関わりの中でよりよい状況に変化していくと考えられる。

保健室という限られた場面で生徒を支援することの多い養護教諭は、その変化を日常の生徒対応からの感覚でつかむだけでなく、今回のような調査により視覚化し、得られた情報を学級担任や管理職など他の教職員と共有することで、それぞれの立場での支援について検討するチームづくりのきっかけとなることを期待したい。

### 【 引用・参考文献 】

後藤美由紀・中條和光・森田愛子：「感染症流行時における予防行動が中学生のコミュニケーションへ与える影響を探る」, 『中学紀要第 50 巻』 65-78, 2021.

文部科学省：改訂「生きる力」を育む中学校保健教育の手引, 2020

東海林渉ら：「中学生用コミュニケーション基礎スキル尺度の作成」 『教育心理学研究第 60 巻第 2 号』 137-152, 2012

1. 今の自分について教えてください。

①最近, 下のことについて自分が気をつけているか, あてはまるものに○をつけてください。

		気をつけていない	あまり気をつけていない	少し気をつけている	気をつけている
1	マスクを正しくつける				
2	こまめに手を洗う				
3	アルコールで手指を消毒する				
4	友達と距離をとる				
5	友達と大声で笑い合わない				
6	友達としゃべらずにお弁当を食べる				
7	声の大きさに気をつける				

②学校での友達の行動についてどの程度気になりますか, あてはまるものに○をつけてください。

		不安に感じる	少し不安に感じる	気にならない
1	マスクをつける			
2	こまめに手を洗う			
3	アルコールで手指を消毒する			
4	自分と距離をとる			
5	自分と大声で笑い合わない			
6	自分としゃべらずにお弁当を食べる			
7	声の大きさに気をつけている			

後藤 美由紀・中條 和光・森田 愛子(2022),「感染症予防行動が中学生のコミュニケーションの困難感に与える影響～対人スキルの観点から見たコロナ禍における自他の心と体を守る力の育成～」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第 51 集」, 68-81.

③今の自分にあてはまるものに○をつけてください。なるべく『はい』『いいえ』で答えてください。

		はい	どちらでもない	いいえ
1	私は、相手に自分の気持ちを伝えるのが得意です。			
2	私は、気持ちをすなおに人に伝えます。			
3	私は、感じていることをわかりやすく伝えます。			
4	私は、気持ちをことばで表現するのが得意です。			
5	私は、相手に伝わるように思っていることを伝えます。			
6	私は、感じていることを正直に人に伝えます。			
7	私は、相手にきちんと伝わるように、自分の感じていることを話します。			
8	私は、思っていることを表情で表現するのが得意です。			
9	私は、相手のさりげない行動から相手の伝えたいことがわかります。			
10	私は、相手が何を考えているか、わかります。			
11	私は、表情から相手の気持ちを想像するのが得意です。			
12	私は、ことばがなくても相手の伝えたいことがわかります。			

2. 友達と一緒にいる時の感じ方について, 1年前とどう変わったか, あてはまるものに○をつけてください。

		気にならなくなつた	変わらない	気にするようになつた
1	自分の表情			
2	自分の視線			
3	自分の言葉			
4	自分の声			
5	自分のしぐさ			
6	相手に気持ちを伝えられているか			
7	相手の気持ちに気づくことができるか			
8	自分が言葉を選んで話しているか			
9	友達の表情			
10	友達の視線			
11	友達の声			
12	友達のしぐさ			
13	自分と友達との距離			

3. 今年の4月から今まで, 友達と関わる時に感じる, 困ったことや気になることを自由に書いてください。